

科学研究費補助金（23330275）報告

海外視察報告 4-2

市立聾学校 Kannebacksskolan（カナベックスクーラン）

1. 市立聾学校の設立経緯と学校概要について

スウェーデンの義務教育：7～15歳までの9年間。5～6歳は保育園があるが義務ではない。ただし市は希望者に保育園を確保する義務がある。16歳児の90%が高校等に進学している。

20年前、県が「すべての難聴児は（ここから100km離れた）国立ベーネスクーランへ通うように」との通達を出し、それまでヨーテボリ市内にあった国立ベーネスクーランの分校が廃校となった。保護者の努力により、1994年立カナベックスクーランが設立されることとなった。なお、遠方から通っている場合、市の負担でタクシー通学もできる（4年生くらいまでの複数の子が相乗りで来ている）。



Kannebacksskolan の外観

聴覚障害児部門（110名在籍）と聴児部門（2倍の在籍数）が併置されている。聾児の場合は0年生（プレ就学）から9（もしくは10）年生まででスウェーデン手話による教育を行っている。難聴児（人工内耳装用児も含む）に対しては、口話+補助デバイスの活用による教育を進めている。言語障害のある聴児も対象として6年生まで在籍している。

附属スネッガン（蝸牛という意味）保育園もある。対象幼児は 1 歳半から受け入れている。昔は約 3 歳からだったが、聴覚障害の早期発見が可能になり変化した。1 歳半以前は、スウェーデンでは育児休暇がしっかりととれるので（センターの支援を受けながら？）家庭で過ごす音がほとんどである。

重複学級もある（スウェーデンには難聴重複児専門の国立学校が 1 校ある）。

職員数は 90 名（内 20 名は聾、重度聴覚障害者）で半数の教職員は手話ができる。職種としては、教員、アシスタント、事務職員、養護教諭、医師、看護師、ソーシャルワーカー、臨床心理士、巡回担当教員、ことばの学級担当教員、学童担当、リクリエーション担当などと多岐にわたっている。

12 歳までを対象とし学童保育を実施している。保護者の勤務時間やニーズに合わせて育児支援として利用できる。授業時間の前と後に利用でき、4 か所ある。12 歳以上では週に一回放課後にグループ指導に参加できる。学童担当の教員がソーシャルスキルトレーニングを行っており、親の勤務条件とは関係なく子どもの成長のために必要だと見なされると学童に通うことができる

2 . 授業見学から

1) 0 年生 (6 歳児) : 4 名在籍。学級定員はないが、だいたい 2 ~ 8 名。補聴器 (以下、H A :) 装用児も人工内耳 (以下、C I) 装用児も在籍していた。移民等で初めて H A : をつける子や、手話を覚えたくて来る子もいる。この日の時間割は、朝の会→あそび→休憩→工作→アルファベットパズル→給食→集団活動であった。教室内では F M システムを活用していた。

担当教員は在校 13 年目、教員生活 34 年目のベテランであった。児童の実態としては、附属保育園から来ているのは 1 名のみ。他 3 名は他の保育園（一般的には 2 5 名程度のクラス）から、手話や小集団の必要性を感じたり、補助機器の活用を期待して入学。また、1 名は移民でスウェーデンの福祉・教育を求めてきている。

2) 1・2 年生 : 9 名在籍。教員は聾者で、手話を用いている。児童の実態としては聴覚活用している者が多い様子だったが、担任の他にもう一名聴者の非常勤講師がついており、音声通訳等していた。また、アシスタントもおり 3 人で授業を担当していた。教室内ではループと F M を活用。大学病院とは連携体制を構築しており、最低でも年間 2 回は病院職員が来校する。それ以外にも必要に応じていつでも連絡でき、保護者を含めて相談を行うこともある。個別指導は週 20 分程度確保、希望があれば増やすことは可能とのことである。



1, 2年生の授業の様子：中央が聾の教員で右端が聴者の教員

3) 7・8・9年生の難聴クラス：主たるコミュニケーション手段が手話の者を聾、音声の者を難聴と明確に区別していた。難聴クラスには言語障害児、重複障害児（下肢障害）も在籍しており、お互いのコミュニケーション手段としては手話を併用していた。教科内容としては下学年対応（？）の様子だった。



7・8・9年生の難聴クラス

4) 8年生の調理実習：3名在籍、内2名は聾、1名は難聴であった。教員は1名だが、手話を使うとき手話のみで、音声の時は音声のみで話しかけていた。



8年生の調理実習

5) 重複学級：4名在籍。校内にはもう1学級重複学級がある。主なコミュニケーション手段は絵カード。不器用さがあるため、「書く」ことに拘らず、パソコンを積極的に活用していた。パソコンで、単語を見ながら打って、変換するとイラストが出てくるソフトを用いて文章を作っていた。なお、前置詞等の機能語も記号化されていた。

3. 巡回指導について

ヨーテボリ市内の200人の難聴児を支援している。一人の担当者が25～30校担当で、市内には4名の巡回指導担当者がある（非常勤含む）。昔は9人いて、ニーズが減っている訳ではないが（財政面から？）縮小傾向にある。また、SA：hlgrensk A：大学病院のSTと連携し、病院でのチーム会議に参加したり、難聴児の情報を交換したりしている。

仕事内容としては、難聴児の在籍校を訪問し、担任やその他の教員、在校生に難聴児のコミュニケーション能力について情報を与えること。担任に座席位置や機器の活用方法、校内の環境整備についても助言する。在籍校での個人面談等にも希望があれば参加する。また、難聴児自身や保護者へのサポートも行う。障害受容についての支援や、地域の難聴児を集めてのグループ活動を行ったりもする。移動は自家用車で行い、一日3～4件訪問することもある。ケース会議等の時間調節が難しいことが悩みである。

質疑応答：

Q：巡回指導対象児の聴力は？

A：軽度の子では一側性難聴の子、30dB位の子も。対象条件としてはHA：,CIをつけていること。

Q：グループ活動の頻度や人数はどのくらいか？

A：様々だが、だいたい10～15名程度。年6回。平日に学校を休んで丸一日使っている。

Q：200人程度対象児がいるということだったが、何らかの要請があって訪問するのか？要請がなくても行くのか？

A：:どちらの場合もある。要請がなくてもこちらから積極的に行く場合も。先生によってはなかなかこちらに声をかけてくれない場合もあるので。

Q：最近のニーズによってできたものか？

A：60年代から巡回のシステムはあった。私も35年間担当している。内容は少し変化があり、以前は難聴児に直接指導していたが、今はあくまでコンサルタント。

Q：併置している聴児の部門との交流はどのくらい行っているか

A：運動会是一緒に行っている。他にもPC教室やサッカー教室などいろいろな交流プロジェクトがある。聴児部門の授業を受けることも計画しているが、なかなか時間が合わず難しい。

また、本校の教員が通常校での研修時に子どもに手話を教えたこともあった。今後はこちらが出向くだけでなく、お互いに行き来できるとよいと思う。

Q：言語障害学級を6年制から9年制に延長する計画はなぜか？その必要性を感じるか？

A：市の方針。必要性はあると思う。6年生卒業後、地域の学校に戻るようになるが難しい子もいる。

Q：学校評価は誰が、どのように？

A：PTAと教員との話し合いが年6回ある。職員内の意見については、取りまとめ役があり、週に1回話し合いが行われる。

Q：教員に女性が多いのはなぜ？

A：スウェーデンの教員の給料はあまり高くない。そのため男性は就きにくいかな？

Q：義務教育卒業後、90%が進学するということがあったが、その後は？

A：大学に進学する権利はある。手話通訳等の情報保障も付けられる。が、実際には大学進学は少ない。また、入学しても卒業するのはさらに難しい。ボルボ（自動車製造）などの組み立て技術では多くの難聴者が働いており、作業系の就職先はそれなりにあるが、オフィスワークは難しい。教員、看護職、心理士などはいる。

Q：本校卒業後はどの程度進学・就職のサポートをするのか？

A：卒業後は学校には責任がないためサポートは行っていない。職安に障害者専門の部署があり、そこで相談を行う。なお、手話通訳等は国の責任でいつでも使うことができる。また、ろう、難聴団体も力を持っており、様々な相談やサポートをしている。